

No.

国際協力事業団 主催 外務省・環境省 後援

国際協力公開シンポジウム

「ガラパゴスの今、楽園の再生と未来に向けて」

2002年3月

国際協力事業団

森林・自然環境協力部

自然水
J R
02-003

— 略 語 —

- Fundacion Natura** (スペイン語表記) = 自然基金 (Foundation Nature)
- A I M** = 政策決定機関 (システム) (Inter-Institutional Management Authority)
- C D R S** = チャールズ・ダーウィン研究所 (Charles Darwin Research Station)
- F / S** = フィージビリティ調査 (Feasibility Study)
- G D P** = 国内総生産 (Gross Domestic Product)
- G E F** = 地球環境ファシリティ (Global Environment Facility) WB, UNEP, UNDP の三機関の共同運営
- G I S** = 地理情報システム (Geographic Information Systems)
- I D B** = 米州開発銀行 (Inter-American Development Bank)
- I N G A L A** = ガラパゴス開発庁
- J I C A** = 国際協力事業団 (Japan International Cooperation Agency)
- J M P** = 意見調整機関 (システム) (Participative Management Council)
- N G O** = 非営利団体 (Non Governmental Organization)
- O D A** = 政府開発援助 (Official Development Assistance)
- P C M** = プロジェクト・サイクル・マネジメント (Project Cycle Management)
- P N G** = ガラパゴス国立公園局 (Parque Nacional Galapagos ; スペイン語表記)
- S I C G A L** = ガラパゴス検査・検疫システム
- U N D P** = 国連開発計画 (United Nations Development Programme)
- U N E P** = 国連環境計画 (United Nations Environment Programme)
- U N E S C O** (ユネスコ) = 国連教育科学文化機関 (United Nations Educational Scientific and Cultural Organization)
- U S A I D** = 米国国際開発庁 (Agency for International Development)
- U C I G A L** = 環境省ガラパゴスユニット
- W B** = 世界銀行 (World Bank)
- W I D** = 女性を配慮した開発援助 (Women in Development)
- エキスパート** = 専門家 (Experts)
- カウンターパート** = 技術移転対象国側行政官、技術者 (Counterpart Personnel (C/P))
- グローバル・イシュー** = 地球規模問題 (Global Issue)
- ジェンダー** = 社会・文化的に規定される性別分類の概念 (Gender)
- 世界遺産** = 文化遺産、自然遺産、複合遺産の三つのカテゴリーがあり、世界遺産条約に基づきその価値が認められた場合のみ世界遺産として登録される (World Heritage)
- 世界自然遺産** = 世界遺産のカテゴリーの一つ (World Heritage Site-Nature)

ガラパゴス諸島 (Galapagos Islands)

エクアドル共和国に属し、南米大陸から西方 980 km の東太平洋赤道下に点在する大小 16 の島々と多数の岩礁からなる諸島です。陸地の 97% はエクアドル政府により 1959 年に国立公園に指定され保護されています。1978 年にはユネスコ世界遺産（自然遺産）として世界で最初の登録地となりました。

[16 の島名リスト]

島名 (日本語)	島名 (スペイン語)	面積 (km ²)
ダーウィン	Darwin	1.1
ウォルフ	Wolf	1.3
ピンタ	Pinta	59.0
マルチュナ	Marchena	130.0
ヘノペサ	Genovesa	14.0
サンチャゴ	Santiago	585.0
ラビダ	Rabida	5.0
フェルナンディナ	Fernandeina	642.0
イザベラ	Isabela	4588.0
ピンソン	Pinzon	18.0
サンタ・クルス	Santa Cruz	986.0
バルトラ	Baltra	27.0
サンタ・フェ	Santa Fe	24.0
フロレアナ	Floreana	173.0
エスパニョラ	Espanola	60.0
サン・クリストバル	San Cristobal	558.0

目 次

プログラム.....	I
会場写真.....	II
主催者挨拶 鈴木 信毅 (JICA 理事)	1
来賓挨拶 乳井 忠晴 (外務省 経済協力局 技術協力課 企画官)	3
<i>Marcelo Avila Orejuela</i> (駐日エクアドル大使館 特命全権大使)	5
基調講演 「ガラパゴス諸島ー進化と生態の実験室」	11
伊藤 秀三 (長崎大学 名誉教授)	
「ただ今、進化中ーガラパゴスのふしぎな生きものたち」	41
岩崎 弘倫 (NHK 番組制作局 科学・環境番組部 ディレクター)	
調査結果報告 「エクアドルとガラパゴスにおける社会・経済の概観と、環境への影響」	49
坂井 茂雄 (株式会社 ラック計画研究所 技術顧問)	
「ガラパゴスの環境保全体制」	75
中沢 信之 (イー・アンド・イーソリューションズ株式会社 環境第一事業本部 副本部長)	
「我が国の協力の視点から」	95
宮川 秀樹 (JICA 森林・自然環境協力部長)	
基調講演・調査結果へのコメント	107
真板 昭夫 (財団法人 自然環境研究センター理事)	
意見交換・質疑応答	117
総括 川路 賢一郎 (JICA 中南米部長)	131
参加者アンケート集計	133

－プログラム－

国際協力事業団主催 外務省・環境省後援
国際協力公開シンポジウム
「ガラパゴスの今、楽園の再生と未来に向けて」

日時：2001年12月13日（木） 13：00～17：30

会場：JICA国際協力総合研修所 国際会議場（東京・市ヶ谷）

12：00 受付・開場

13：00 開会・主催者挨拶

鈴木 信毅（JICA 理事）

13：15 来賓挨拶

乳井 忠晴（外務省 経済協力局 技術協力課 企画官）

Marcelo Avila Orejuela（駐日エクアドル大使館 特命全権大使）

13：25 基調講演

「ガラパゴス諸島－進化と生態の実験室」

伊藤 秀三（長崎大学 名誉教授）

「ただ今、進化中－ガラパゴスのふしぎな生きものたち」

岩崎 弘倫（NHK 番組制作局 科学・環境番組部 ディレクター）

14：45 調査結果報告

「エクアドルとガラパゴスにおける社会・経済の概観と、環境への影響」

坂井 茂雄（株式会社 ラック計画研究所 技術顧問）

「ボルネオ島の魅惑的な蝶たちの世界」

中沢 信之（イー・アンド・イーソリューションズ株式会社 環境第一事業本部 副本部長）

「我が国の協力の視点から」

宮川 秀樹（JICA 森林・自然環境協力部長）

15：35 休憩

15：50 基調講演・調査結果へのコメント

真板 昭夫（財団法人 自然環境研究センター 理事）

16：10 意見交換・質疑応答

進行：川村 始（JICA 森林・自然環境協力部 水産環境協力課長）

パネリスト：伊藤 秀三（前出）、坂井 茂雄（前出）、岩崎 弘倫（前出）、

中沢 信之（前出）、真板 昭夫（前出）

17：25 総括

川路 賢一郎（JICA 中南米部長）

17：30 閉会

司会進行係：奥村 真紀子（JICA 森林・自然環境協力部 水産環境協力課）

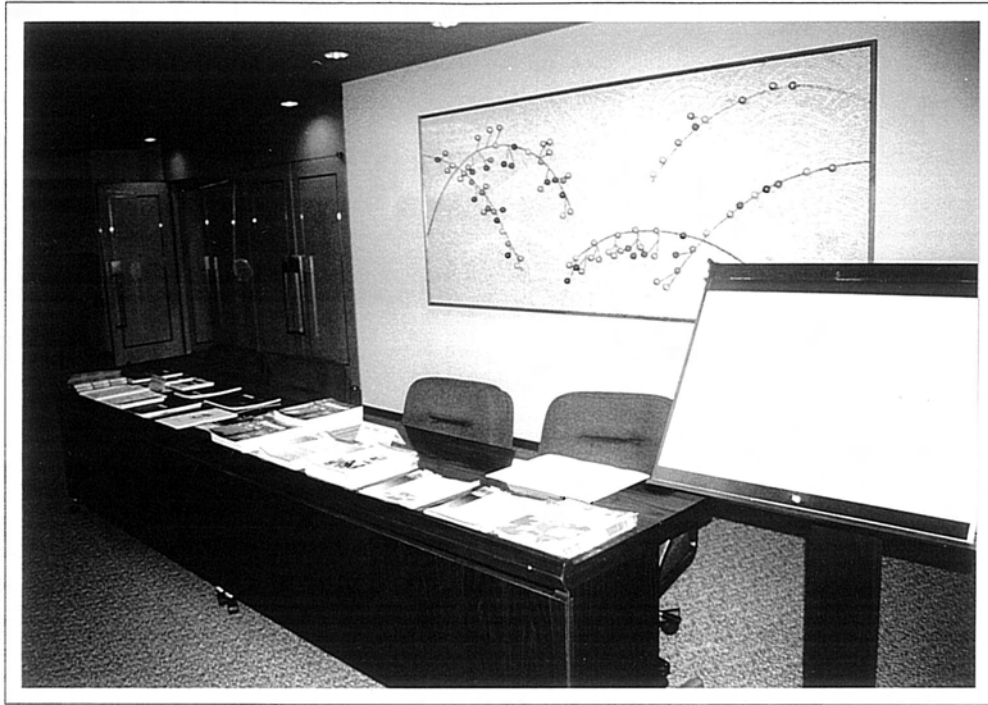
会場写真



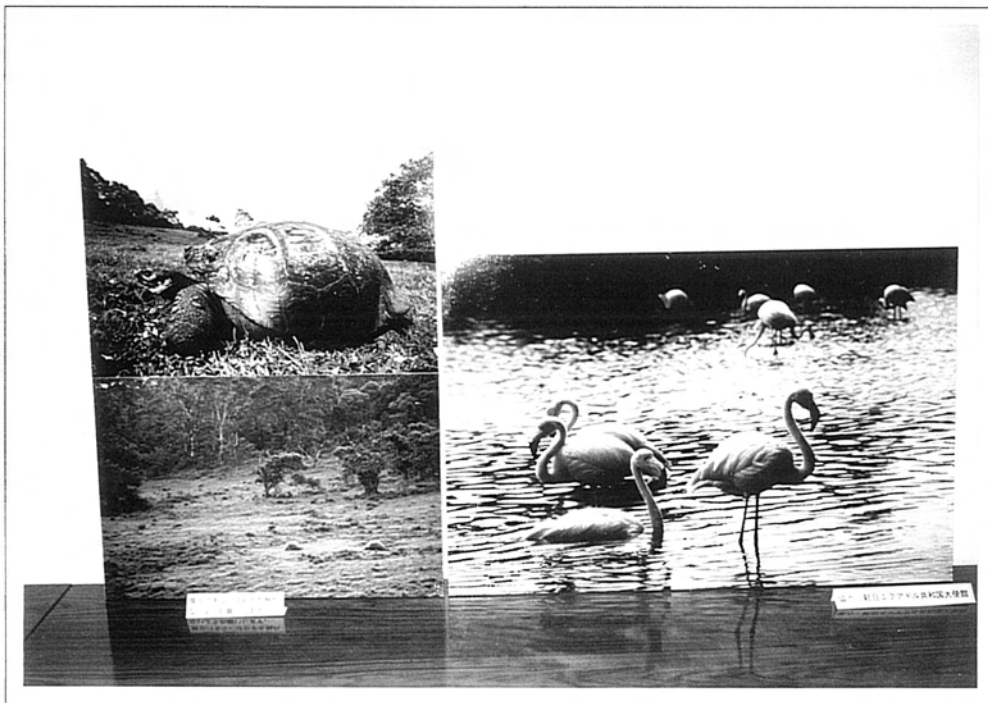
〔会場風景〕



〔パネルディスカッション〕



[受付風景]



[展示パネル (駐日エクアドル共和国大使館より)]

主催者挨拶

—鈴木 信毅（JICA 理事）—

○奥村 真紀子（司会／JICA森林・自然環境協力部水産環境協力課） それでは、大変お待たせいたしました。ただいまより国際協力事業団主催、外務省ならびに環境省の後援による国際協力公開シンポジウム「ガラパゴスの今、楽園の再生と未来に向けて」を始めさせていただきます。

司会を務めさせていただきますのは、私、国際協力事業団森林・自然環境協力部水産環境協力課の奥村でございます。最後までどうぞよろしく願いいたします。

では初めに、主催の当事業団を代表いたしまして、理事の鈴木信毅より挨拶をさせていただきます。

鈴木理事は、森林・自然環境協力部及び中南米部の担当でございます。鈴木理事、よろしく願いいたします。

○鈴木 今ご紹介いただきましたJICAの森林・自然環境協力部、中南米部担当の理事をやっております鈴木と申します。シンポジウムの開会に当たりまして、一言ご挨拶申し上げたいと思います。

今日は雨の中、大変お忙しい中、大勢の皆様方にご参加いただきましてありがとうございます。ご来賓の外務省経済協力局企画官の乳井様、駐日エクアドル共和国特命全権大使マルセロ・アビラ閣下、基調講演をお願いしております長崎大学名誉教授の伊藤先生、NHK科学・環境番組部ディレクターの岩崎様、そのほか本日のプレゼンターやコメントーターの皆様方、貴重な時間を割いていただきましてご参加いただき、ありがとうございます。また、日ごろJICAの自然環境協力及び中南米における協力の推進につきまして、多大なるご理解とご支援をいただいておりますことを心から感謝申し上げたいと思います。

さて、本日のシンポジウムで取り上げますガラパゴス諸島は、皆様ご案内のとおりでございますが、エクアドル共和国の沖約 1,000 kmの太平洋上に浮かぶ火山諸島で、大陸から遠く離れた環境のもと、独自の進化を遂げた動植物が棲んでいることで知られており、ユネスコ（UNESCO；国連教育科学文化機関）世界自然遺産（World Heritage Site-Nature）の第1号に登録されております。しかし、16世紀に初めて人類が訪れて以来、ヤギなどの外来種の侵入、自然資源の搾取、近年の急激な人口増加による廃棄物、生活排水汚染などで独特の生態系が脅かされてきているというのも事実でございます。これに対しまして、自然保護のためのさまざまな取り組みも行われてきております。

このような中で、本年1月ガラパゴス諸島近海において、タンカー・ジェシカ号¹が座礁して油が流出しました。この事故を受けまして、我が国は2月と5月に専門家を派遣し、さらに本年7月には短期調査団を派遣しまして、ガラパゴス諸島の生態系保全の重要性と、我が国の協力へのニーズを確認いたしました。

人類にとって貴重な世界遺産を守るため、特に生態系への人間の影響を軽減するためには、これらの遺産の多くが開発途上国に存在することもあり、世界的に協力して、ともに守っていくことが必要だと思います。ODA（Official Development Assistance；政府開発援助）による日本の技術協力としても、従来の技術移転型の協力だけでなく、生態系保全のようなグローバル・イシュー（Global Issue；地球規模問題）について、共に考え、共に取り組んでいく形での協力が必要になってきております。これは世界の一員としての日本の責任でもあると考えております。ガラパゴスの独自の生態系の保全は、その象徴としてとらえることができ、日本の貢献をアピールしていくよい機会でもあると考えております。

本日のシンポジウムでは、ガラパゴス研究の第一人者であり、新書「ガラパゴス諸島」の著者でもある長崎大学の伊藤先生、ガラパゴスを紹介する番組をつくられているNHKの岩崎ディレクターに講演をしていただきます。その後、短期調査に参加したコンサルタントのお二人から、その結果のご報告をいただきます。さらに、財団法人自然環境研究センターの真板理事からコメントをいただき、その後、会場の皆様方と質疑応答をさせていただきます。どうか皆様方の積極的なご質問やコメントをお願いいたします。

私どもJICAとしましては、本日のシンポジウムの結果を踏まえて、今後どのような協力が有効か、方向性を見定めてまいりたいと思います。

最後に、今後ともガラパゴスへの協力を含め、JICAの自然環境分野の協力に一層のご理解とご協力をお願いしましてご挨拶といたします。

どうもありがとうございました。（拍手）

¹2001年1月16日ガラパゴス諸島サン・クリストバル島沖合約1kmのところで、エクアドル船籍「ジェシカ」号が座礁し、積載していたディーゼル油や重油70万ℓが流出。深刻な海洋汚染を引き起こした。

来賓挨拶 1

－乳井 忠晴（外務省経済協力局技術協力課企画官）－

○奥村（司会） では、続きまして、ご来賓のお二方からご挨拶をいただきたいと思えます。初めに、ご後援いただきました外務省から、経済協力局技術協力課の企画官でいらっしゃいます乳井忠晴様よりご挨拶を賜りたいと思えます。乳井様、よろしくお願ひいたします。

○乳井 ただいまご紹介にあずかりました乳井でございます。着任して二週間にしかたらないものですから、まだ勉強中の身でございますけれども、よろしくお願ひいたします。

今日、公開シンポジウムにご招待いただきまして、一言ご挨拶させていただきます。

1992年の地球環境サミット²、1997年の国連環境開発特別総会³、こうした国際的なフォーラムを契機^{けいき}にいたしまして、我が国は自然環境の破壊、汚染、あるいは生態系^{かくりん}の攪乱^{かくらん}といった問題が人類生存^{おびや}を脅かす重大な地球規模の問題であるという認識に立ちまして、我が国政府ならびに国際協力事業団は、環境ODAの拡充^{かくじゅう}ということで、これまで努めてまいりました。その結果、環境ODAの実績が、1999年度でODA全体の34%に達して、その総額が5,000億円を超えております。自然環境というものが人類生存の基盤であるとするれば、その自然環境の保全、あるいは人間が自然環境と調和して生活すること、それがまず我々人類社会の持続可能な発展・反映の原点であろうかと我々は考えております。それがまた人間、人類共通の重い課題ではないかと考えております。

しかしながら、経済が発展し、生活が近代化し、また、その歪み^{ひず}として出てきます貧困、こうしたことによって自然環境が地球規模で破壊されているという事実もあります。本年1月に発生いたしましたガラパゴス諸島沖合のタンカーの座礁によります燃料油流失事故、これは我々にとってまだ記憶に新しいところではございますが、ガラパゴス諸島の自然環境が我々にとって、人類社会にとって共通の自然遺産であるということからすれば、まさに我々は背筋の寒くなる思いがしたわけでございます。

政府ならびに国際協力事業団は、この事件をまさに契機^{けいき}にいたしまして、ガラパゴス諸島の自然環境、あるいは生態系を保全するために何ができるんだろうかということに着目して、これまで調査を進めてきております。

² UNCED; United Nations Conference on Environment and Development, 環境と開発に関する国際連合会議。1992年にリオ・デジャネイロで開催された。

³ UNGASS; Special Session of United Nations General Assembly to Review and Appraisal of the Implementation of Agenda 21, アジェンダ21の実施状況の全般的なレビューと評価のための国連総合特別会合。1997年6月にニューヨークで開催された。

しかし、その場合に留意しなければならない点が幾つかあると思います。まず、人類共通の自然遺産とは言いながら、ガラパゴス諸島というものはエクアドル国が世界に誇る財産であるということ。我が国をはじめ国際社会は、エクアドル国政府の環境保全努力、そうした努力に連帯し、かつ協力する、支援するという形で、そういうパートナーシップ関係を構築するという形で支援の手を差し伸べていく必要があろうかと考えております。

また、環境保全の問題というのは、社会経済的な側面を初め、ほかの分野とさまざまなかかわり合いを持つ非常に複雑な問題でございます。したがって、総合的な調整も必要になるかと思っております。そして、何よりも重要なことは、自然環境というものが人類にとってかけがえのない財産であるという認識を皆さんが、あるいは我々が共通して持つこと、それが一番基礎にあることではないかと考えております。

本日は駐日エクアドル大使のマルセロ・アビラ閣下もご出席されております。ガラパゴス諸島を人類共通の自然遺産として、これからどのように保全していくかということ、エクアドル国との友好協力関係をベースとして、みんなで知恵を出し合って考えていく、これが今日の公開シンポジウムの目的ではないかと考えております。

ガラパゴス諸島の環境保全問題、そういった協力事業活動というものは、単に日本のエクアドル国に対する政府開発援助ではございません。広く一般の方々の理解と協力がなければ達成できない問題であろうかと考えております。皆さんの叡知、こうした公開の場での意見交換を通じて建設的な意見をいただいて、より効率的な保全の方法を考えていく、まさに本日のシンポジウムがそういったことの機会となればということで、その効果、その結果、また、より効率的な協力事業、それからエクアドル国との友好協力関係、そういったものに発展していくことを希望しております。

簡単ですが、挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

来賓挨拶 2

—Marcelo Avila Orejuela (駐日エクアドル大使館特命全権大使) —

○奥村 (司会) 引き続きまして、駐日エクアドル大使館特命全権大使マルセロ・アビラ閣下よりご挨拶を賜りたいと思います。

駐日エクアドル大使館様よりは、本日、会場の外に展示しております写真パネルの提供にご協力いただきました。マルセロ・アビラ閣下、よろしく願いいたします。

○Marcelo Avila Orejuela (逐語通訳) 皆様こんにちは。ガラパゴスセミナーの開催に対し、心よりお祝い申し上げます。本日のセミナーが、世界遺産でもあるガラパゴスの自然環境保全のためのODA、また日本とエクアドルの関係強化につながることを望みます。

ガラパゴス諸島は、エクアドル共和国の西方 980 kmの太平洋上に位置しており、13 の大きな島及び6つの小島、さらに多数の岩石等から形成されております。それらの島々は、地質学的には若く、誕生してから 300 万年から 500 万年しか経ておらず、地球上で最も活発な海洋性火山帯の一部を形成していると考えられています。

ガラパゴス諸島に存在する動植物の多くは、この諸島のみ^に生息する種であり、これにより独特の動植物群が形成されています。

ガラパゴス諸島は、1535 年にスペインの修道士フライ・トーマス・デ・ベルランガによって偶然に発見されました。16 世紀後半には、ガラパゴスは多くのイギリスの海賊の作戦基地となりました。1684 年には、これら海賊の一人アンブロス・コウリーが簡単な地図を作製し、それぞれの島に英国の王族や貴族の名前を命名しました。1970 年代に入ると、これらの海賊は捕鯨漁師^に変わっていきます。

ジェイムズ・コルネット船長は、英国王室により、この地域の鯨油及び捕鯨の可能性を調べる調査を任命され、1793 年及び 1794 年にガラパゴス諸島を訪れました。コルネットはガラパゴス諸島の最初の正確な地図を作製し、フロレアナ島にバレル郵便局を設置しました。

捕鯨漁師は、数年間、海上で生活をします。彼らが郵便局に手紙を残すと、英国本国への船がこれらを運び、同時に英国より彼らへの手紙を運ぶ中継地点となっていました。このバレル郵便局は、今日でもポスト・オフィス湾の海岸に見ることができます。

18 世紀に入ると、船乗りの新鮮な蛋白質の供給源となるガラパゴスゾウガメを捕獲するため、島に上陸するようになりました。その後、1832 年のエクアドル共和国の独立により同国に帰属することとなり、現在に至っています。

何名かの科学者は、ガラパゴス諸島に存在する幾つかの種は、すでに絶滅した有史以前

の動植物につながっていると考えています。ここガラパゴス諸島においてチャールズ・ダーウィンは、後に彼の有名な理論である「進化論」のもととなります動植物種が環境条件に対し適合する能力を有していることを突きとめました。

1997 年後半から 1998 年前半にかけての 9 カ月間にわたり、ガラパゴスはエルニーニョ現象⁴に見舞われ、海水温の異常上昇や激しい降雨といった激的な気候変動による被害を受けました。エルニーニョによる被害は甚大で、それはエクアドル全土に及び、とくに生産及び社会インフラにおいて大きな被害が発生しました。人的な被害として 400 名以上の死者、また 6 万人以上の人々が家を失うという結果になりました。さらに、エクアドルの代表的な輸出作物であるバナナやカカオ、コーヒーの農園やマンゴやメロンといった熱帯果樹の農場が洪水による被害を受け、通常の出量の生産体制に戻るまでに数カ月間を要する結果になりました。ガラパゴス諸島も例外ではなく、多くの種に被害が発生しました。

エクアドル政府はガラパゴス諸島の環境保全に非常に大きな意義を見出しており、その政策の中でユネスコの世界自然遺産にも登録されたガラパゴスのその特異性と脆弱性^{せいじやく}において、特別な対策を施すに値すると考えております。ガラパゴス諸島を愛するエクアドル政府及び国民は、ガラパゴスの保全の必要性を強く認識しています。それがガラパゴス諸島の自然保護に関連する数多くの法律や規制が施行されている理由でもあります。

島を取り囲む水域における商用ベースの漁業活動は規制と監視^{かんし}が行われ、年間に同諸島を訪問する観光客の数が制限されている点には注目すべきでしょう。加えて、来訪者はガラパゴス諸島内にいる間は厳しいルールを遵守^{じゅんしゆ}する必要があります。同諸島への航空便はエクアドル本土からのみ認められており、周辺水域での航海権は慎重^{しんちゆう}な基準に依じて許可されています。しかしながら、人間の存在は常に島の生態系バランスを崩す危険性を持っています。

ガラパゴス諸島は多くの科学者やジャーナリストが訪問し、その結果、さまざまな記事やテレビ番組としてマスメディアに広く公開されてきました。日本人としても藤原幸一^{さちいち}さんが過去 10 年間に継続的にガラパゴスを訪問し、日本の代表的な雑誌等に貴重な論文を発表されました。

また、そのほか多くの日本人の方々がガラパゴスを訪問したことをつけ加えます。例えば数年前には常陸宮夫妻が、また最近では石原慎太郎東京都知事が、小笠原諸島をガラパゴス諸島のような自然保護区にしたいとの意向を持って訪問されています。

⁴ 太平洋赤道域の南米沿岸から中央部の日付変更線付近にかけての広い海域の海面水温が平年に比べて数℃上昇し、それが半年から一年半程度継続する現象で、数年に一度発生する。

⁵ 南極やアフリカ、南米などをフィールドとして取材活動している著名なフォトジャーナリスト。

石原都知事はガラパゴス諸島を訪問し、人類誕生以前の自然生命がどのように調和のとれたすばらしい共存を可能としてきたかについて強く印象づけられました。彼がガラパゴスを訪問し執筆した文章において、文明とその汚染の危険性について真剣な調査の必要性を求めています。彼および多くの人々が共感している我々の地球、またガラパゴス諸島さえも危うくする破壊的な影響を止めるために、私たちは何か行動を起こさねばなりません。本日のセミナーが皆様方にとって有益なものであることを望んでおります。(拍手)

JICA Symposium

Galapagos Now

For the Renewal and Future of the Paradise

December 13th, 2001

GALAPAGOS

Message from His Excellency Marcelo Avila Orejuela, Ambassador of Ecuador

The Galapagos Islands are located in the Pacific Ocean, 980 kilometers to the West of the Republic of Ecuador. There are 13 major islands, 6 smaller islands and numerous islets and rocks. Geologically speaking they are young, three to five million years, and are still considered one of the most active oceanic volcanic regions on earth. The Galapagos possess a fauna and flora unique due to the fact that a large number of species are endemic of the Archipelago.

A Spanish friar, Fray Tomas de Berlanga, discovered the islands accidentally in 1535. Beginning in the late 16th century, the Galapagos became a base of operations for many English pirates. In 1684, one of these buccaneers, Ambrose Cowley, made the first crude map of the islands and named each of them, mainly after English kings and noblemen. By 1790 pirates were being replaced by whalers. Captain James Colnett was commissioned by the British Crown to investigate the possibilities of sperm- whale fisheries in region and visited the islands in 1793 and 1794. Colnett made the first reasonably accurate map of the archipelago and set tip a "Post office Barrel" on Floreana. Whalers, who would be at sea for years, would leave letters in the barrel and ships heading back to England to port would pick up be seen the letters and deliver them to port. The Post Office Barrel may still be seen today on the shore in Post Office Bay. In the 18th century, whalers used to disembark in the islands to capture the Galapagos tortoises, which will stay alive for months in the ships and provided fresh protein for the sailors.

Finally, in 1832, the archipelago was claimed by the then, newly independent

Republic of Ecuador.

Scientists consider that some species are the closest link to extinct prehistoric animals. Here, in the Galapagos, Charles Darwin was able to determine the abilities of species to adapt to the conditions of the environment, which later gave way to his famous theory of the "Evolution of Species".

During the last months of 1997 and the beginning of 1998, for a period of nine months, the Galapagos were hit by the battering of "El Niño", a peculiar oceanic condition that brings drastic weather changes, particularly high water temperature in the ocean, which leads to heavy rainfall. The consequences of El Niño were dramatic all over the Republic of Ecuador and the victims and damages to production and infrastructure were immense. More than 400 people died and 60.000 were displaced from their homes. Besides, plantations of the main export products of Ecuador, such as Banana, Cacao, Coffee and tropical fruits such as Mango and Melon were seriously affected by the floods and several months will elapse until normal export levels are reached again. The Galapagos were not an exception and many species were affected.

The Government of Ecuador ascribes enormous importance to the protection of the environment, and within this policy, the Galapagos Islands, as Natural Heritage Site of Humankind, deserve a special treatment considering their characteristics and vulnerability. The Government and People of Ecuador cherished the Galapagos and are aware of the need to preserve them. That is why numerous laws and regulations are enforced to protect the nature of the archipelago.

Amongst other aspects considered, it should be noticed that commercial fishing activities in the surrounding waters are regulated and monitored, and the number of tourists that are allowed to visit the islands every year is limited. Additionally, visitors should follow strict rules while in archipelago. Direct flights to the islands are allowed only from continental Ecuador and permission

to navigate in the waters encircling the islands are subject to scrupulous standards. Notwithstanding, the human presence will always bring risks to the balance of the ecosystem in the archipelago.

The islands are visited by many scientists and journalists who, as a result of their journeys, publish articles and produce TV programs that are widely distributed in through the mass media. This is the case of the article of Mr. Koichi Fujiwara, who during the last ten years has permanently visited the Galapagos and has published important articles in leading Japanese magazines.

I should also mention the fact that the Galapagos have been visited by many other Japanese personalities, among them, Prince and Princess Hitachi, several years ago, and recently by Mr. Shintaro Ishihara, Governor of Tokyo who visited the islands looking for inspiration to convert Ogasawara Island into a protected area.

During his visit to the Galapagos Islands, Governor Ishihara was very much impressed by how natural life permitted a marvelous balanced coexistence to every form of life before the human beings were present. In an article he wrote upon his trip, he calls for a serious scrutiny about the dangers of civilization and its polluting effects. He, and many others share his view, that something has to be done to stop the destructive effects which certainly are endangering our world and even to the Galapagos Islands.